

令和元年8月29日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02274

研究課題名(和文) 明治時代京都の工芸とそのイギリスにおける受容と相互影響に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Art Crafts of Meiji Kyoto and Their Reception in Britain, and Mutual Influence

研究代表者

野口 祐子 (NOGUCHI, Yuko)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：80128769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、江戸時代までの優れた技術の蓄積があった京都と、工芸品の重要な輸出先であったイギリスを対象に、工芸品の受容とその変遷、そしてイギリスと日本の相互影響という観点から実施した。

明治時代、京都の工芸品は欧米で大人気であったが、中には粗悪なものもかなりあったことが、当時の欧米人の記述からうかがえる。日本に現存する数少ない例だけでは、京都で作られた工芸品の実態はわからない。そこで、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館(以下V&A)の収蔵品を毎年実見調査し、それらがV&Aに収蔵されるに至った経緯について所蔵文献を調査した。その成果は毎年度『京都府立大学学術報告 人文』において公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在あまり知られていない京都における輸出工芸品生産の実態、およびイギリスにおける流行と美意識の変化に伴う輸出工芸品受容の変化を解明した。特に人気が高かった陶磁器の場合、明治後期になると、技術・意匠の改革に励むも京都の装飾陶磁器は輸出産業として急速に衰微した。その原因の一つは、欧米における室内装飾の趣味が変化したためであったが、日本への関心の変化もあった。イギリスにおいて茶陶に代表される日本本来の陶磁器への理解が進み、日本人自身も歴史的に価値あるものに注目するようになった。

研究成果の概要(英文)：This study is to investigate the reception of Kyoto export art crafts in Victorian Britain, and the mutual influence of Britain and Japan in the development and decline of Meiji art industry.

In Meiji period, Kyoto art crafts were in vogue in the West, but quite a few of them were in bad quality and bad taste according to contemporary British travel books and art magazines. As we cannot find many examples of those export products in Japan, it was helpful to examine the large collection of Victoria & Albert Museum (V&A) in London.

The visit to V&A and its storehouse, and the investigation of the materials concerning the purchase of Meiji Kyoto products were annually carried out with the help of V&A, and the results were published in The Scientific Reports of Kyoto Prefectural University, Humanities, every year.

研究分野：比較言語文化、特にヴィクトリア朝イギリスと日本との関係

キーワード：国際京都学 ジャポニズム 輸出工芸 ヴィクトリア&amp;アルバート博物館所蔵品調査

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はイギリスを中心とした欧米言語文化研究の蓄積を基礎として、明治時代の京都を訪れた欧米人の旅行記や英語ガイドブックの研究を10年間続けてきた。旅行記やガイドブックの記述は当時の京都を知る上で貴重な資料であるだけでなく、著者の価値観や社会のイデオロギーを反映するテキストとして、そのディスクール自体が分析対象となる。

旅行記には京都で工芸品の店や工房を巡った記述が頻出する。研究代表者を務めた2013～2015年度科研費基盤研究(C)「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」では、イギリス人旅行者は京都を、工業資本主義化が進んだイギリス自体のアンチテーゼとみなし、アーツ&クラフツ運動のモデルとすべき手仕事の美が息づいている京都への憧れと、日本の近代化・欧化への失望のまなざしが見出せることを明らかにした。

(2) 明治時代の工芸は、もっと注目されてよい分野である。絵画における近代化と「日本画」ジャンルの成立と同様に、工芸も近代化の過程で欧米からの影響を受け、また欧米のデザインに多大な影響を与えた。2015年に東京芸術大学とボストン美術館が中心となって開催した「ダブル・インパクト 明治ニッポンの美」展のように、近年は日本と西洋の相互影響をテーマとする展覧会が盛んになってきたが、これまで取り上げられた作品の多くは浮世絵を含む絵画芸術であり、工芸分野での「ダブル・インパクト」の解明はもっと追究されるべきテーマであった。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、従来、京都の近代史の中で殖産興業の一環として論じられることが多かった明治時代の工芸に焦点を当て、京都地域のローカルな歴史としてではなく、グローバルな工芸と芸術思潮の歴史の中に位置づけることを目的とした。本研究を「国際京都学」と位置付ける所以である。海外輸出に活路を見出した京都の工芸品生産の特色、および米国とともにその主要な輸出先であったイギリスでの受容とその変化に注目した。

(2) 19世紀後半から20世紀初期にかけて日本の美術工芸が欧米に与えた影響は「ジャポニスム」として知られている。本研究では、特に当時のイギリスにおける芸術思潮、日本理解の偏向、インテリアやファッションにおけるジャポニスムの流行とその変化との関係を追究した。また日本国内における社会全体の変化や京都における生産体制の変化が工芸品にどう反映したか、明治の工芸の技術とデザインは衰退したのか、後の時代に継承されたのか、これらの疑問について多角的にその解明を目指すものである。そのためには文献調査とともに、作品の実見と、作品の製造者・製造過程・現在の所蔵場所に収まるまでに辿った経緯など、個々の作品が持つストーリーを重視して全体像を解明することを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は、文献調査と作品の実見調査からなる。明治の工芸の特色として第一に挙げるべきは、その超絶技巧が生み出す美である。第二に挙げるべきはその多くが欧米向けの輸出品として作られたことである。1860年代からイギリスで高く評価されたその技術力と意匠だが、1870年代には粗悪品の濫造を嘆く声が旅行記に見られるようになる。1910年ロンドンで開催された日英博覧会へは京都も官民挙げて参加し、美術工芸品を多数展示したが、時代の変化を読み取れなかったことがわかる。それらの変化を文献と作品自体が語るストーリーから追究した。

(2) 京都の輸出工芸品は、ジャポニスムの流行時に大量に生産され、欧米で消費された。そのため現在の日本には、優品以外にほとんど残っていない。その実態を解明するために、関連図書を収集するとともに、毎年イギリスで文献調査を実施した。

京都府立京都学・歴彩館には明治時代京都の製造者、生産体制、博覧会への参加体制など工芸に関する資料が豊富にあり、研究を支えられた。日本で入手できない図書や、当時の雑誌などについては、3年間に実施した在外研究時にロンドンの大英図書館で閲覧した。大英図書館においては、イギリスにおける日本の美術工芸品の流行と衰退について、19世紀後半から20世紀初期までの英語文献を渉猟した。

(3) 当時の海外市場を意識した工芸品の意匠、海外での受容、変遷を解明するためには、海外の美術館等に現存するコレクションの調査が必要になる。ロンドンのV&Aは、国内外の美術工芸品を収蔵する世界的な博物館であり、日本の美術工芸品も数多く所蔵されている。本研究にはその収蔵館に保存されている膨大な明治時代の美術工芸品のコレクションを実見することが必要であった。在外研究時にはV&Aの学芸員の協力を得て、当時Satsumaと呼ばれて大人気であった京都粟田焼の輸出陶器をはじめ、明治時代の輸出工芸品がいかんにしてV&Aに収蔵されるに至ったかについて、個々の作品が持つストーリーの解明を試みた。

#### 4. 研究成果

(1) ジャポニスムの流行は、当時欧米で盛んに開催された万国博覧会に日本が出品した美術工芸品への熱狂から始まったとされる。V&A の前身であるサウス・ケンジントン博物館も、1851年にロンドンで開かれた第1回万国博覧会で収集した作品を収蔵し、国民の美術工芸・デザイン教育に資する目的で設立された。現在のV&Aにおいても、万国博覧会が美術工芸とデザインに及ぼした影響を視覚化した展示に工夫がなされており、そのような展示においても京都から欧米に渡った工芸品をみることができる。しかしV&Aのコレクションには展示室で目に触れない数多の京都産の工芸品が収蔵されている。本研究における調査ではV&Aのシニア・キュレーターであるグレゴリー・アーヴィン氏の協力を得て、V&Aの収蔵館に保存されている作品も実見する機会を得た。V&Aの収蔵館には、当時の欧米で人気のあった派手な武者絵を施したペアの大壺をはじめ、当時の日本人の好みからかけ離れた装飾性の高いモノ、今日の目からみればグロテスクな意匠、粗悪なモノが数多く収蔵されていることが確認できた。その中にはコレクターからの寄贈品も多く含まれる。日本から輸出された工芸品の来歴をたどることができるそのコレクションは、歴史を検証するための貴重なアーカイブである。

本研究の1年目では、1870年代以降、京都の粟田焼で多く生産された装飾性豊かな輸出用陶器 Satsuma が主にイギリスでどう受容されたかに注目した。V&Aにおける調査では、主に装飾性の高い陶磁器について調査したが、明治初期から茶陶(茶碗、茶入、水指など)も収蔵されていることがわかった。茶陶については、日本の装飾陶磁器に魅せられたリヴァプールのコレクター、ジェームズ・ロード・ボウズが日本美術工芸品に関する啓蒙的な著作をものする際に徹底的にけなしていることから、ボウズのそのような日本美術工芸へのまなざしが培われた背景と、欧米における茶陶の受容への変化について考察した。錦光山を代表とする京薩摩が1900年代から急速に欧米で勢いを失っていく背景には、単に装飾陶磁器が飽きられたというだけではなく、茶陶に代表される日本の陶磁器への理解が進んだことも理由としてあるのではないかと考えるに至った。この調査の結果は『京都府立大学学術報告 人文』第68号(2016)にて報告した。

(2) 1年目の研究では、ボウズが感じた茶陶への関心の高まりについて、1876年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会と、そのコレクションを受け入れたロンドンのサウス・ケンジントン博物館、そしてその解説を出版した大英博物館学芸部長のフランスの著作自体の影響に触れてはいるが、ボウズがいう日本製陶磁器受容の変化の原因を解明するには至らなかった。そこで、2年目のイギリスにおける調査では、フィラデルフィア万国博覧会に展示され、1877年にサウス・ケンジントン博物館所蔵となった日本陶磁器コレクションの全容に注目することにした。このコレクションは、ボウズのような愛好家によるコレクションではなく、当時注目されていた日本陶磁器を日本人自身が歴史的・地域的に網羅するという意欲的な事業であった。日本人自身の手によって構成されるがゆえに、最近作られた輸出用陶磁器でもなく、古く見せかけた「偽物」でもない「真正」なコレクションであり、歴史的・地域的に網羅するがゆえに博物学的に優れたコレクションである、という当時の考え方が反映していることがわかった。ただし実態は輸出用陶磁器を多く含み、また装飾陶磁器に偏ったコレクションであることが、調査によって確認できた。しかしまた、ボウズのコレクションや当時の流行と違うのは、茶陶もかなり含まれることであった。V&Aが所蔵する受け入れ価格を表す資料によれば、茶陶の価格は装飾陶磁器より総じて安価であり、当時の茶陶の評価がそこから窺い知れる。

このコレクションはサウス・ケンジントン博物館が受け入れた当初は、全216点が目立つ所に誇らかに展示されたが、今日ではV&Aの複数の展示室と収蔵館に分散して収蔵されている。この調査の結果は『京都府立大学学術報告 人文』第69号(2017)にて報告した。コレクションが企画された段階から追跡することによって、イギリスにおける日本陶磁器への関心の高さと、当時の日本とイギリスの文化交流の実態を明らかにした。

(3) 3年目には明治時代末期の状況を把握するため、1910年にロンドン西郊で開催された日英博覧会における京都の関与に注目した。1902年には日英同盟が締結され、1905年には日露戦争に勝利した日本への関心が高まっていた時代に、日本政府は日本の近代化を認めさせる絶好の機会として、日英博覧会では工業製品、近代的な陸海軍、欧米モデルの社会制度などの展示に力を入れたが、同時にイギリス側に期待されている従来の日本イメージに沿った展示も行った。京都からも美術工芸品の展示を中心に、それまでの万博以上に、官民あげて取り組んだ。ロンドンでの調査で注目したのは、西本願寺唐門の縮小レプリカの展示と、京都が独自に英語のガイドブックとパンフレットを作成したことである。その中で、西本願寺唐門を「大胆に海を越えて朝鮮に至り日本の名を海外に広めた」豊臣秀吉ゆかりの建造物として紹介し、「秀吉の時代に京都が遂げた発展を紹介する」と解説している。欧米人の好みに沿った展示を行いながら、欧米列強と肩を

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

並べた帝国主義日本、というイメージが採用されていることが確認された。日本イメージの齟齬はその後大きくなっていく。この調査の結果は『京都府立大学学術報告 人文』第70号(2018)にて報告した。

(4) 京都の製造者の手になる一つ一つの作品は、それぞれの機会に、京都から海を越えてイギリスに渡り、誰かが手にした後、今V&Aの收藏館の棚の中に眠っている。このような個々の作品が持つストーリーを重視して全体像を解明することに努めるのが本研究の目標であった。3年目に研究代表者が実施した一般公開セミナー「伝統+テクノロジーが生み出す新たな美 明治150年 京都工芸のモノがたり」ではこのストーリーをわかりやすく伝え、参加者の理解と関心を高めた(京都府立大学文学部主催、京都府立京都学・歴史館、京都府立大学京都地域未来創造センター共催、2018年10月27日)

1年目、2年目の在外研究では、V&Aの收藏館に保存されている主に明治時代の陶磁器、七宝焼、金工等を実見し、それらがV&Aに收藏されるに至った経緯について、所蔵文献を閲覧調査した。3年目の在外研究時には、セミナーで現代の蒔絵作家からお話をうかがう準備として、京都製の輸出漆器も実見した。

明治時代、欧米に名を馳せた京都の工芸家に粟田焼の錦光山宗兵衛と有線七宝の並河靖之がいる。いずれもV&Aに多くの作品が收藏されており、調査した。並河靖之については、その邸宅、工房、庭が並河靖之七宝記念館として保存されている。3年目には記念館の学芸員である武藤夕佳里氏の協力で、アーヴィン氏とともに並河の作品と活動に関する調査を進める機会を得た。その解明については今後も共同研究を継続して取り組む予定である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

1野口祐子、1910年開催の日英博覧会における京都の関与についての考察、京都府立大学学術報告 人文、査読無、第70号、2018、43-58

<http://id.nii.ac.jp/1122/00006160/>

2野口祐子、ヴィクトリア&アルバート博物館所蔵の1876年フィラデルフィア万国博覧会に展示された日本陶磁器コレクションに関する調査について、京都府立大学学術報告 人文、査読無、第69号、2017、99-112

<http://id.nii.ac.jp/1122/00006104/>

3野口祐子、ヴィクトリア朝イギリスの日本陶磁器ブームにおける Satsuma 受容の容態--ジェームズ・ロード・ボウズの著作を中心に--、京都府立大学学術報告 人文、査読無、第68号、2016、73-88

<http://id.nii.ac.jp/1122/00006053/>

[その他]

報告書(計2件)

1野口祐子、平成28年度~平成30年度科学研究費助成事業 基盤研究(C) 研究成果報告書 明治時代京都の工芸とそのイギリスにおける受容と相互影響に関する研究、2019、1-79

2野口祐子、国際京都学セミナー 伝統+テクノロジーが生み出す新たな美 明治150年 京都工芸のモノがたり 報告書、2019、1-74

公開セミナー

1野口祐子、伝統+テクノロジーが生み出す新たな美 明治150年 京都工芸のモノがたり、一般公開セミナー、京都府立大学文学部主催、京都府立京都学歴史館、京都府立大学京都地域未来創造センター共催、2018年10月27日

## 6. 研究組織

(1)研究分担者  
なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：グレゴリー・アーヴィン  
ローマ字氏名：(Gregory IRVINE)

研究協力者氏名：武藤 夕佳里  
ローマ字氏名：(MUTOH, Yukari)

研究協力者氏名：松田 万智子

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

ローマ字氏名：(MATSUDA, Machiko)

研究協力者氏名：福島 幸宏

ローマ字氏名：(FUKUSHIMA, Yukihiro)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。